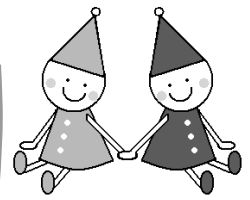


支援センターだより



2010.9.発行 vol.71

「夏の間も、毎日親子さんで賑やかですねえ。」と笑顔で声をかけてセンターの前廊下を通る、元気村利用の市民の皆さんがいます。センター利用の親子さんたちの様子を見ては、パワーをもらっているようです。

「すごい暑さだけど、バギーで来る赤ちゃんたち、大丈夫ですか。」市民活動支援センターのIさん。先輩ママとしては、アスファルト道路の照り返しで、より地面に近い位置のバギーのお子さんが気になるというご注意…。できるだけ伝えているのですが…と答えつつ、こんな風に心配して、子育て中の皆さんを見守ってくださる地域の視線（め）を感謝したい気持ちでいっぱいになりました。

子どもの声のしない世の中は、子どもが明るくあそぶ姿が消えた社会は、死の世界と同じだ…。何かの本ではたと立ち止まった一節です。

熱帯夜は誰でもイラつくかもしれない。長い夏休み、毎日子どもと付き合うのがしんどすぎると訴える声もある。でも、暑くも寒くも何の苦痛もない毎日は、感受性も鈍らせ、耐えることで身につけていく生きる力を弱まらせてしまう…。子どもの育ちも、人の育ちも、快適さだけでは人形のような画一的な人を育て上げてしまいかねない。

多くの親子さんとのやりとりの中で、『いま辛いことがあるよね。でも助け合っていこう。何でも話してね。あるいは、黙っていても気持ちを察するから傍にいようね。』そんな思いで関わりを持たせてもらっています。

どうぞめげないで、一人で抱え込むのが辛すぎるときは、そっと訴えてきてください。いつでもお手伝いできるよう待っています。



子どもを巡って暗いニュースが続きました。虐待死した子どもたち、どんな思いで幼い日々を生きたのでしょうか。

- ・大阪、3歳女兒と1歳男児。夜中に「ママー」と叫ぶ声を何人もの近隣の方が聞いていた。置き去りにされて死亡。（死体遺棄で母逮捕）
- ・東京、7歳男児。継父と実母からの暴行で死亡。
- ・奈良、5歳男児。両親から十分な食事を与えられず餓死。近隣に激しい泣き声が聞こえていた。
- ・福岡、5歳女兒。母親からの暴行で死亡。1月の夜、寝せられていたのは浴槽だった。「私、さみしいの」とこの子は言っていた。

「読売新聞 特集・届かぬ叫び」から

どうぞ、虐待ほっとライン 042-347-3192 に、近隣の子どもの心配事をお電話ください。小平に悲しい子を一人でも出さないようにと祈る日々です。

両方 仁子

